4　銭貨の流通について

東北地方に於いては、近世墓の報告例が少ないこともあり、墓中から出土した銭貨に関する研究は非常に少ない。しかし、墓中に埋納された銭貨の分析は、出土した墓の上限年代を示すばかりではなく、当時の貨幣の流通状況を復元する上でも多くの情報をもたらすものと考えられている。したがって、ここでは宮城・福島・岩手の３県で発見された中世末～近世の墓を対象に銭貨の出土状況を簡単にまとめた後で、本遺跡における銭貨の出土状況と比較してみたい。なお、分析に際しては鈴木公雄氏の方法(鈴木・1988)に従った。

表16は宮城・福島・岩手で発見された19遺跡255例の中世～近世墓を、出土した銭貨の組み合わせ別に集計したものである。また第90図は、６枚組のもの90例を抽出して各銭貨の出現頻度をグラフにしたものである。

まず表16をみると、①渡来銭と寛永通宝(古寛永銭、文銭、新寛永銭)が共伴するものが非常に少ないこと、②それに対して古寛永銭と文銭、文銭と新寛永銭あるいは３種類すべてが共伴するものが圧倒的に多いことが確認できる。このことは第90図ではさらに顕著に現れ、①の組み合わせは僅か３例を確認するのみである。このような状況は、渡来銭から古寛永銭への切り代わりが非常に急激であったのに対して、古寛永銭から文銭、文銭から新寛永銭への変換は緩やかであったことを示しており、江戸府中(鈴木・1988)や九州地方(櫻井・1997)の出土状況とも共通している。したがって、江戸時代においては銭貨の流通に関する地域差は全国的にみてもほとんどなかったものと考えられる。

さて、本遺跡の銭貨の流通状況については、渡来銭のみが出土する墓が存在しないため、古寛永銭への移行状況については定かではない。しかし、古寛永銭の出土が285枚と全体の40％を越すのに対して、渡来銭の出土は僅か14点のみであり、出土した銭貨の２％にしか過ぎない。このような状況からみると、本遺跡でも寛永通宝への切り替わりが迅速に行われた可能性が推測される。[11]

一方、古寛永銭・文銭・新寛永銭の出土状況についてみると、新寛永銭鋳造以後も多量の古寛永銭や文銭が共伴しており、寛永通宝同士の切り替わりについては明確な変化は認められない(表６参照)。

また、本遺跡では渡来銭と新寛永銭が共伴する墓を６基確認している。このような組み合わせは全国的にみても新寛永銭出現以降は減少傾向にあると考えられており、今回取り上げた遺跡でも南諏訪原遺跡、宮脇遺跡、早稲田遺跡(以上福島)、下猿田Ⅱ遺跡(岩手)で各１基づつを確認するのみである。したがって出土する枚数自体は少ないものの、本遺跡では18世紀以降においても渡来銭の埋納例が比較的高い確率で認められることが特徴的であると考えられる。

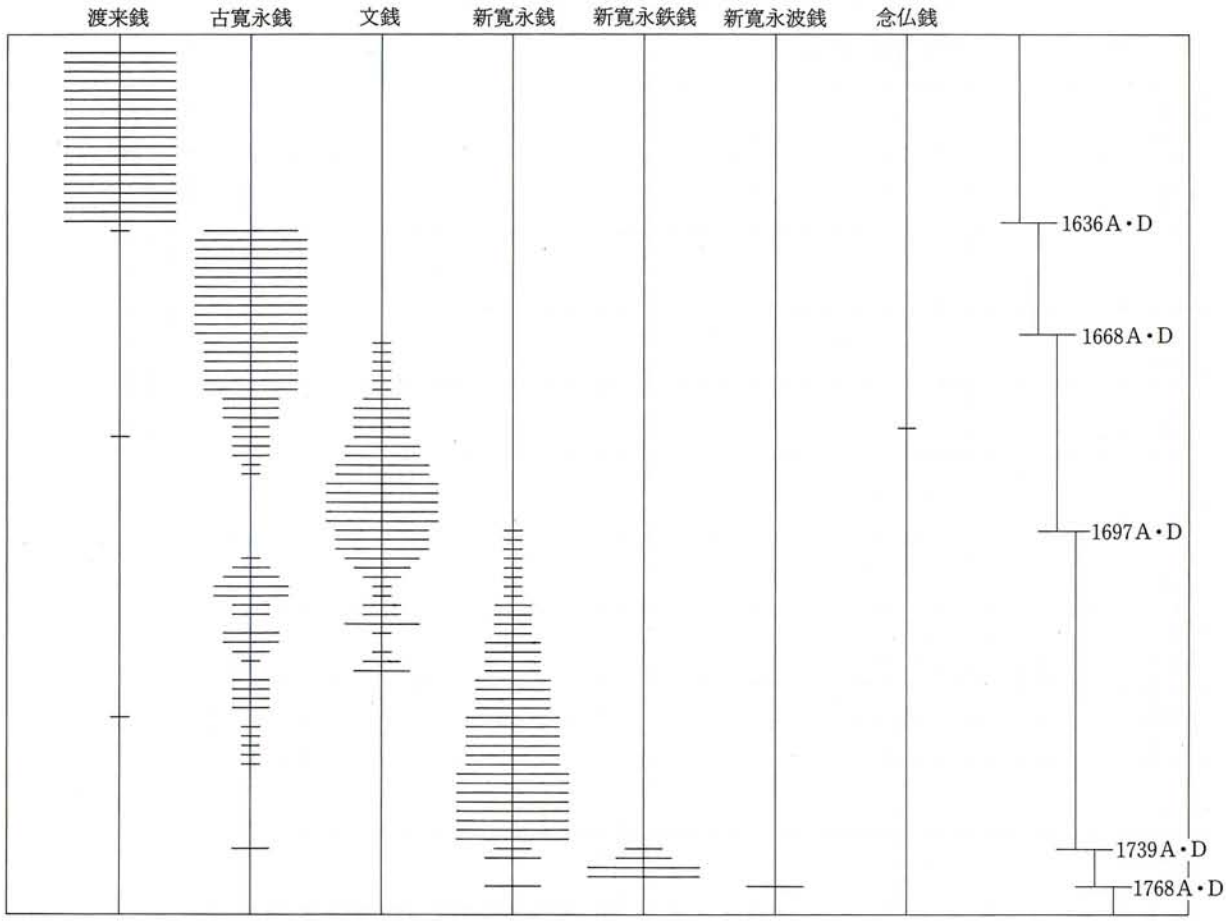
---

(11)　本遺跡の西側0.5kmに所在する大日南遺跡では、中世末～近世初頭頃と考えられる墓壙21基を発見しており、そのうち７基の墓から銭貨が出土している。これらはすべて渡来銭のみで構成されており、いずれも６枚組みのものであった。本遺跡とは距離的にも近接していることや、年代的にも近い時期のものであることから、両遺跡の銭貨の出土状況は本遺跡周辺における渡来銭から古寛永銭への移行を端的に示しているものと考えられる。

表16　墓中出土銭貨の組み合せ一覧(宮城・岩手・福島)

六道銭の組み合せ	遺跡名	大日北	大日南	泉崎浦	北前	町	日光山	沼	下藤沢II	南諏訪原	五十辺	宮脇	早稲田	仙台内前	水無	御在所D	下猿田II	下猿田III	長瀬B	長瀬C	合計
	墓数(六道銭埋納墓数)	70(36)	21(7)	31	6	3(3)	35(10)	12(7)	21(17)	98(73)	6(5)	12(11)	—	10(10)	—	3(2)	18(14)	3(2)	14(8)	21(14)	
渡来銭のみ(6枚セット、以下同様)			7(7)			1	3(1)			9(7)	1(1)	3(3)	8								32(19)
渡+古							1(1)		4	1		1									7(1)
渡+古+文		1					1(1)						1(1)								3(2)
渡+古+文+新		6											1(1)								7(2)
渡+古　+新																					
渡　+文																					
渡　+文+新										1(1)		1									2(1)
渡　+新																	1				1
古寛永のみ		2		1(1)	1(1)	1(1)	2	1	1	15(6)	1	1(1)	2(1)		3						31(11)
古+文		6(3)		1	2(1)	1(1)		1(1)		10(5)		2(1)		1(1)							24(13)
古+文+新		9(2)		1	2			1(1)	3	9(4)		1	2(1)	1(1)	1(1)						30(10)
古　+新		5(1)		1			3	2(1)		9(4)	1(1)	1(1)			1		5(1)			2	30(9)
文銭のみ		1								6(5)											7(5)
文+新		1						1	2	5(3)	1(1)			1(1)	1						13(6)
新寛永のみ		3		5					1	4(2)		1				2(1)	1			7(5)	23(8)
鉄銭のみ																				2(2)	2(2)
渡　+鉄																					
渡+古　+鉄																					
渡+古+文　+鉄																					
渡+古+文+新+鉄																					
渡　+文+新+鉄																					
渡　+新+鉄																					
渡+古　+新+鉄																					
渡　+文　+鉄																					
古　+鉄																					
古+文　+鉄																					
古+文+新+鉄																					
文　+鉄																					
文+新+鉄																					
新+鉄																	6(1)	2		1	9(1)
古　+新+鉄																	1			2(1)	3(1)
真鍮四文銭を含む									1(1)												
文久永宝・天保通宝を含む									1												
その他													1(1)								1(1)
不明		1(1)						1(1)	4(1)	4(4)	1(1)		3(3)	7(7)					8(3)		29(21)
合計(6枚セット)		36(7)	7(7)	9(1)	5(2)	3(2)	10(3)	7(4)	17(2)	73(41)	5(4)	11(6)	17(7)	10(10)	6(1)	2(1)	14(2)	2	8(3)	14(8)	255(111)

宮城—大日北・大日南(多賀城)、泉崎浦・北前・町・沼(仙台市)
日光山(大和町)、下藤沢II(瀬峰町)
福島—南諏訪原、五十辺、宮脇、早稲田、仙台内前、水無
岩手—御在所D、下猿田II、下猿田III、長瀬B、長瀬C



第90図　墓中出土銭貨セリエーショングラフ（宮城・福島・岩手）

Ⅵ　ま　と　め

1　今回の調査では近世墓70基とそれ以前の水田跡を発見した。

2　発見した墓についてはA～D期という時期区分が可能であり、それぞれA期：1636～1668年頃、B期：1668～1697年頃、C期：1697～18世紀後半頃、D期―18世紀後半以降という年代が推定できた。

3　墓域の広がりについては、各時期の墓の分布状況から、調査区西側から東側へと展開していったと考えられる。

5　出土遺物についてみると、木棺を伴う墓では棺内部と掘り方から出土するもので大きな違いが認められた。民俗事例を参考にすると、前者は副葬品と考えられ、後者は葬具であると推測される。

6　被葬者の階層については、埋葬施設や出土した遺物から判断すると豪農クラスであった可能性が考えられる。

参考文献

阿部正光・佐藤敏幸　「宮城県の近世墓と六道銭」　兵庫埋蔵銭貨調査会　『近世の出土銭Ⅰ―論考編―』　1997
石川長喜　「発掘された墳墓について」　岩手県埋蔵文化財センター　『紀要Ⅲ』　1983
岩城隆利　「供養具の意味について」『日本民俗学大系―４―』（祖先祭祀と葬墓）　名著出版　1996
岩崎敏夫編　『東北民俗資料集』八　1979